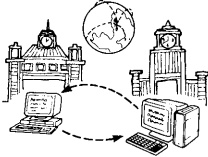
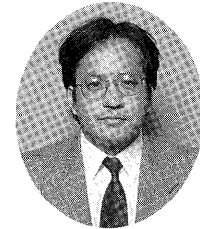


巻頭言



理論と実際の邂逅の場としての情報処理学会

岩野 和生†



この一年程、情報処理学会の事業担当理事を受け持ち、全国大会の改善活動を行ってきた。本稿では、その間に学会活動や情報処理産業の役割などについて感じたことをまとめてみたい。

情報処理学会の会員数は、1993年に32,000名を超えたが、世の中の景気の後退もあり、最近では漸減し今では30,000名弱となっている。全国大会は発表件数、出席者数ともに年々減り、発表件数が1,000名程度（会員数の3.3%）、出席者数が2,000名程度（同6.7%）になっている。

最近の産業界を振り返ってみると、円高や景気後退の中、ビジネスプロセスリエンジニアリングという観点から、価値あるものを戦略的に選び出し積極的に投資している。その一方では、価値の見出しにくいものへの投資を整理していこうとしている。また技術動向の観点から見れば、地球規模のネットワークという「情報基盤(Infostructure)」の出現が話題になっている。たとえば、最近話題のインターネットは、全世界に約3,000万のユーザを持ち、月に10%の割合で増加しているといわれる。この情報基盤の上での「いつでも、どこでも、誰でも、何にでも」を実現する情報処理、ビジネス、セキュリティなどが情報産業の焦点になっている。コンピュータのユーザ層と応用分野の急激な拡大につれて、ユーザインタフェース、マルチメディア技術の発展が望まれている。

このような背景のもとでは、私たち情報産業に携わる者の社会に対する役割は、非常に大きくなっている。第一に、社会に対して、技術動向の展望やそれらのもたらす社会・生活への意味・影響を具体的に示し、技術に裏付けされた大きな流れを作り出すことが必須である。単に、コンピュータの処理速度、メモリの容量、ネットワークの伝送速度の向上に専念すればよいものではない。つまり、「社会への提言や情報の発信」という側面である。第二に、情報基盤の成熟とともに、ネッ

トワークを介して非常に競争の激しい専門的な小集団がたくさん形成されると考えられる。そのような社会では、どれほど独自の価値や情報を持ち、ネットワークに提供できるかが、個人や企業の生き残りにとって不可欠になるだろう。こうした状況では、個人や企業が持っている深い技術を世の中に適用し、また、逆に時代の要請に基づいた技術を生み出していくという「理論と実際の融合」が重要になるだろう。

これら2つの側面を考えたとき、情報処理学会の諸活動は、新たな意味合いを持つと思われる。具体的な例をあげれば、全国大会に関して次の2つの事を期待したい。1つは、技術・理論、そして斬新なアイデアを持った人と、応用や実践の人との邂逅の場にしたいのである。もう1つは、全国大会を公開講演などを導入してもっと社会に対して開かれたものにし、いろいろな提言や情報を発表していく場にするのである。そのような観点にたつて、つぎのような案が議論されている。たとえば、新たにプログラム委員会を設置し、大会ごとに時代の流れを反映したプログラムの企画、立案、実行を自由に行っていく。そして、タイムリーなテーマで新しいアイデアや技術や問題に触れられる場にしていく。さらに、「大会優秀賞」を新設し、非常に優れた論文・発表・アイデアを表彰し、これらの論文をそのままの形で学会誌に掲載する。このことによって、全国大会で発表されたすぐれた仕事が全会員のほんの6%の出席者だけではなく、残りの94%の会員と共有される事を目指したいのである。そして、さらにその仕事が発展していくことを望んでいる。

このように考えれば、会員数30,000人の情報処理学会は「理論と実際の邂逅の場」として、また「社会への提言や情報の発表の場」として、いろいろな夢を持てる刺激的な集団であると言えるのではないだろうか？

(平成7年7月11日)

† 本会事業担当理事 日本アイ・ピー・エム(株)